

西洋教育事情散見

—— ニュー・ジャージー・ジュイスブルグそして
オランダ各都市を歴訪して ——

都 築 亨

1. はじめに

私が文部省教員海外派遣団第15団の一員として長期研修を命じられたのは55年9月9日から10月8日までの1か月、訪問先はアメリカ合衆国、ドイツ連邦共和国、そしてオランダ国の3か国であった。その3か国をほぼ10日間で1国ずつ訪ねたことになる。視察先を示されたのは6月、筑波での事前研修の時であり、その折は、何となく変りばえのしない国ばかりを訪れることになりそうだという感想をもったものである。

しかし、よく考えてみるとこの3国は日本の近代化のプロセスの中で、最も大きな影響をわれわれに及ぼした国々であったはずである。サンフランシスコ近郊を一巡したさい、ふと見た「咸臨丸渡航記念」の碑の中に120年前の日本とアメリカ合衆国とのあいまを確認したのであるが、それ以前の鎖国日本がふれ得ただ一つの西洋の国はオランダであり、明治から昭和20年8月までの戦前の日本の国家と文明に対して、絶えず方向付けと活力を与えつづけてきたのは、アメリカ合衆国とドイツであった。戦後の日本に対する合衆国の文明のもつ意味は言うまでもない。

結論を先に言ってしまうと、日本の近代化にとって培養素となったのはオランダ、ドイツ、アメリカ合衆国の三つの文明であったが、その故地を目のあたり見ることができて、ようやく翳りのみえてきた現在の日本と文明と教育を見なおす機会が与えられたのは私にとって何より幸いであった。そして、その国々の文明が日本の社会と教育に投影したかげをみつめるとき、そこに投影された虚像よりも、はるかにその実像の方が健全で、可能性にみちたものであることを痛感させられたのである。

2. 人種問題と男女平等の国

アメリカで考えたこと

東京空港発19:15 パンナムで、サンフランシスコ空港に到着したのは9月9日12:30ごろである。その空港のトイレで手を洗って後に使った紙の硬きにまずアメリカ合衆国の虚像は早くもくずれた感じをもった。おそらく日本国内のどこの便所にも使っていないであろうと思われるゴワゴワした黒い紙であった。

合衆国に入って最初の夜はシスコの街の探訪。同室の清水東高校のK先生が、日社の駐在員でシスコ在任数年の卒業生に案内を頼んであるということで、そのさそいにあつかましくも乗って、案内してもらうことにする。そして寒いサンフランシスコの夜の町をドライブし、飲んだり、みたり。9月というのにこの国の最初の夜はいかにも寒かった。12~15℃位で、聞くところによれば、シスコは年中この位の気温で、昼は暖かいが夜は冷えるとのこと。

若いガイド氏はアメリカの住み易さ、気楽さをいろいろと語ってくれた。日本と違って身分や家柄、上司とか、隣り近所の目を全く気にしないで生きていけるのがこの国らしい。男女も全く平等で、能力もそれなりに評価される。われわれ視察団が、そろってジャージシティの高校をおとずれた時にも、向うの先生方からどうしてこの中に女性の教員がいないのかを異口同音にたずねられたが、合衆国であったなら男性教員ばかりがこうした栄ある視察団に選ばれるはずはないし、教員の男女比に比例してしかるべし、というようなことであった。あるハイ・スクールでは、体育の時間にゲームをしている生徒たちが、普通の服装で授業をうけているのを不思議に思い、質問したところ、数年前にニュー・ジャージー州の法律ができて、学校内のあらゆる機会において男女は平等に扱われなければならなくなった。その結果男女が別々の更衣室を使うことも法律違反になるので更衣室は今使っていません。ということであった。男女平等ということも、考えてみると随分むつかしい内実を含んでいると痛感した。

ことほどさように平等の国がアメリカ合衆国である。人種の問題についても多少は風聞するところがあったはずであるが、現実あらゆる職場に黒人の人が働いており、ジャージシティの様に75%以上が黒人で、学校内においてもいたるところ白人と黒人とがとけこんで生活しているところを見て、人種のかかえる問題に手をやくというよりは、非常に気を使っているという感じを深くしたのである。州の人口比に応じて白人と黒人の生徒数の%をみるができるが、しかし、白人の上流家庭では子供達を私立のミッション・スクールにやっている場合が多いとすると、人口比以上に公立では黒人の就学率が増加する。ある高校では入学試

験の結果、明らかに白人の子よりも成績の低い黒人の子が合格し、よい点をとった子が落第して、今その訴訟が起されているということである。コロンビア大学では黒人は授業料を払わなくてもよいという法的保護によって白人の学生がしめ出されるというような現象をもたらしているとか、そういう類いの話を聞くと、平等とばかりいってよいのかなという感じも起ってくる。

シスコの夜の案内をしてくれたH氏の話によれば、でも裏へまわってみると、黒人と白人はもちろんのこと、白人でもイタリア系やアイリッシュはアングロ・サクソンとは区別され、学歴は問題にしないといいながら、ハーバード大学出は別だというのが合衆国の実情らしい。たてまえとほんねは違うということではない。やはりアメリカは民主主義の社会であり、平等を強く指向しようとする。それに違いないのだが。

人種の問題については、ドイツでも、オランダでも考えさせられた。やはり日本は単一民族国家である。それが平等の内実をあいまいにもしているし、一方ではヨーロッパ・アメリカよりもより平等な対人関係もつくっている。

3. ニュージャージー州の教育

ニューヨークD・Cのハドソン川を隔てて向い側がジャージシティである。ジャージシティの人口20万。黒人が70%でほかにプエルトリコ系やラテン系の人が多い。したがって高校の人種構成もほぼそれに近くなっている。7つばかり参観したハイ・スクールも1つを除いて大同小異、ほぼ平均化されている。だからミッション・スクールを除けば大体この州の高校はこんなものだといえそうであるが、市教委の説明によれば、次々と流入する人口が多く、その中で特に低所得層に属する人々がかなりの%をしめるため、市の財政に余裕がなく、教育関係にまで予算がまわりきらないのが現状だという。したがって高校での主たる教育のねらいはどのようにしたら地域や父兄の要求に応じて基礎的な最低限度の読み、書き、常識を高校生につけることができるかということである。

多くの学校では出席常ならざる生徒の状態に対してどのようにすれば出席率が上がるかに腐心し、又コンピューターを使って、生徒の毎時間の出欠を掌握することに努めている。又A高校では選択のコースを120位用意して、製図やら自動車の運転・料理などさまざまな科目の単位をとらせ、L高校ではその中に美容科もあって黒人の可愛い女の子達が、互いに髪かたちを整えあっていた。

体育館やプールは社会教育にも開放しているためかなり立派であるが、概して理科とか授業の設備、備

品は古く、かつ少ない、教育予算が乏しいということはその辺の事情に由来する。

ニュー・ジャージー州の義務教育年限は、6～15才の10年間で、6～13才までの8年間の小学校の上に4年制のハイ・スクールが存在する。だから、ハイ・スクールの上級2年間は義務年限には入っていないが、質問したところ父母の承諾がなければやめられない様になっているので、実際にはほとんどの子供がつづけて上級2年にまで進むことになるという。

その辺りの事が、高校で出席率をあげることに苦心したり、高校内で100をこえる選択コースを用意して、生徒の興味関心にそった教育課程をつくることになる。卒業に必要な単位は116単位。毎年保健体育を含む最低29単位が必修で、国語(英語)25単位、米国史10単位、数学10単位、理科5単位、保健4・体育12単位。他に選択50単位。職業指導にかなりの時間数をさいており、S高校では校外実習に80時間をあて、午前中は学校で勉強、午後は弁護士事務所とか、医師の下働き等の労働体験をさせ、それを学校の単位にふりかえている。面白いやり方だと思った。

L高校は黒人の女性の若い校長で、生徒もほとんどが黒人といってよいほどであったが、そうしたいろいろの配慮にもかかわらず、生徒の学習への関心が思うようにはあがらず、又父兄も学校教育に対して熱意を示してくれないことを校長先生は嘆いてみえた。500人位入学しても最終学年まで出てくるのはどうやらその6割くらいらしい。そういえば、このハイ・スクールの校門の外には多分その学校の生徒らしい子供達が数名煙草のようなものを手にしながらたむろしていた。

アメリカでも、ヨーロッパでもそうであったが、学校の外で起ったことについては学校の方からはノー・タッチで、逆に言えば手出し無用ということになる。

L高校の玄関に入った途端拳銃を所持したおまわりさんがひかえていて、一瞬ギョッとしたが、州法による駐在で特に暴力行為によるものではなかったらしい。

ニューヨークあたりの高校の荒廃・暴力化が巷間つたえられているが、ニューヨークのすぐ近くのこのジャージシティにそうしたことが起っていないとは思えない。でもそのおまわりさんのいた高校の黒人の子供たちの人なつっこい顔からは到底そんなことはうかがえない。帰るわれわれを二階の窓からさかんに手をふって送ってくれた。

4. ニューヨーク、ワシントン散見

折角大都会ニューヨークの隣りにまで来たのだからということで、ホボケンという名の地下鉄の駅から、ジャージシティ滞在中に2度ばかりニューヨーク探訪する。ブロードウェイ、五番街あたりを徘徊し、2.5ド

ル奮発してエンパイア・ステートビルに上り、霧にかすんだような大都会を鳥瞰する。ニューヨークの地下鉄の汚なさについては聞かされていたし、それほど驚きはしなかったが、ホームといわず車内といわず、落書きの仕放題という感じの地下鉄は、夜9時を過ぎたら絶対に1人で乗ってはいけませんという添乗員の厳重な注意もなるほどと思わせる。そういえば、学校にも落書きが多かった。しかも玄関口の横に大きく、である。大学紛争の折の日本の大学の壁にみられたような類いのものである。

街の中も紙くずは散乱するし、落書きも多い。ところが不思議なことに公園に入ると紙くず空籬はないし、清掃はゆきとどいている。日本と逆である。ニューヨークを離れる前日遊覧バスでもう一度首都めぐりをしたが、その折ガイド嬢はいついた。軍備と低所得者のための保障費にあんなに金を使わなければ、こんな所は立ちどころにきれいにするんですがね、と。

世界の最先端を象徴する高層ビル街のすぐ隣りにスラム街がある。バスでサーと一巡した感じでニューヨークの街がどういう都市なのか説明するのに困難である。そして若者はニューヨークの生活をエンジョイするが、結婚して家庭をもつと郊外に庭つきの家を構える人が多くなる。老後ひっそりと暮すためには再びニューヨークに入った方が何かと便利だという。だからこの街は若者と老人が多く、夜には白人の数がめだつて減ってくるという。ニューヨークD・Cとニュージャージー州との人口の流出・流入には税の額も関係するところが多いらしい。ニューヨークD・Cは8%で、ニュージャージー州は6%の一般消費税が生活にかかってくるというが、これが意外に大きな問題だという話である。

ハイ・スクールの公民の授業の一つの、そして最も大きな目的は何のために税を納めるのか、税の行方はどうなっているかを将来の市民たちにしっかり知らせておくことだという。

5. ジュッセルドルフからジュイスブルグへ

ニューヨーク、ケネディ空港発9月19日18:00、20日の午前7時30分にはフランクフルト空港に着く。

ヨーロッパの最初の空気は朝である。通貨の交換が心配のたねであったが、何となく終って、アウト・バーンを高速バスでジュッセルドルフに入る。アメリカと違って、ドイツには落ち着きがある。細かい所まで気を配った心づかいがある。ジュッセルドルフは特に西ドイツの経済の中心で、日本の商社・会社・銀行の支店も多い。一寸気になったのはホテルが街の中心からかなり遠い所で、ジュッセルドルフの中心街に出かけるのにはかなり時間があること、でも時間を見つけて

出かけるのに市電を利用するのはなかなか楽しいことの一つにもなった。夕映えのホーフガルテンは美しい。

ケーニヒス・アレーの通りを散策し、ショッピングとドイツ・ワインを味わうにふさわしいレストランを探しながら、二、三人の有志でハイネの生家を訪ねてみることにした。あちらこちらとそれらしい家をさぐりあてながら歩きつかれ、ようやくそれらしい建物に“Heine”の文字をみつけたのは夕暮れ間近、すぐ隣りにいた人に聞いたのにわからないという風をされたのは、我々の語学力の不足か、向うの文学的知性の不足か、ハイネの家の階下はレストランになっていた。

ジュッセルドルフには二泊、9月22日ジュイスブルグ到着、ドイツでの主訪問地である。ジュイスブルグ市は人口58万、ルール工業地帯西部の中心地で、ライン川とルール川の合流点、ヨーロッパ最大の河港をもち鉄鋼生産の中心という。恰度西ドイツの総選挙の真最中というのに、政党々首のポートレートが、町の中心に二、三掲げられている以外それらしい騒々しさも感じられず、目抜き通りの工事中の区域を除けば、極めて整然と、ととのった美しい町である。学校訪問の途中に見かけた緑地帯というよりは鬱蒼と茂った樹々に囲まれた風情のある屋敷のたたずまいはジュッセルドルフよりも清潔な感じである。

ジュイスブルグでの学校訪問の感想はまとめて書いておきたい。それは数校のギムナジウムの内実はそれぞれに個性をもったものにちがいはないのだが、ジャーシシティのハイ・スクールやオランダのいろいろの学校がきわ立って対象的な特徴をもっているのに、ドイツのギムナジウムの子供たちの顔つきはどこを見てもドイツ人らしい。さすがエリートだと感じさせるような何かをひとしく持っている。合衆国でさまざまな人種の混りあった学校をみてきた直後だったからかもしれないし、又我々の参観したギムナジウムは何れも同年令層の25%を収容するハイ・レベルの学校だったことにも起因するであろう。できれば、ハウプト・シューレカレアル・シューレを参観できればよかったのにという声も団員からはしばしば聞こえた。(別表)

西ドイツでは教育行政は各州の権限とされ、したがって我々の参観したジュイスブルグの教育はウエストファーレン州のものである。次頁の表に示したようにグルンドシューレ(基礎学校)を終えると、その成績によって3種類の中等学校への進路が決定される。

- (1) ハウプト・シューレ(実用的職業基礎教育5年)
- (2) レアル・シューレ(実科学校でより高度な職業教育と一般教育を行い6年制である。)
- (3) ギムナジウム(大学へ連繫する教育を行う9年間)

1970年よりこれらの3種を併置したゲザムト・シュ

西洋教育事情散見

ーレ（総合学校）が実験的に設立（ジュイスブルグ市には1校）されているということで、いってみれば総合制高校の試みであろう。

そういう体系の中でのギムナジウムの教育がエリート教育であることは間違いない。ラテン語重視のギムナジウム、理数系のギムナジウム（この市出身の地理学者の名をとってメルカトール・ギムナジウムという）現代語系のそれと、3つの学校にそれぞれ進路、教育課程の差はみられたが、概して、理科・数学は日本の高校と同じ程度の内容とみられ、英語教育はすべてオールラウンドで、同行された英語の先生の話によれば、日本の語学教育とひきくらべてすばらしく、「こうありがたいもの」というような内容で、自然に外国のことを学ばせている感じであった。

授業時間は5～6時間だが、かなりのギムナジウムで1時に授業は終わり、あとは市や教会のいろいろな施設で、スポーツをしたり、部活動にあたるような地域活動をしたり、日本みたいに塾や予備校もないらしくて、のびのびと学生生活を送っているようにみうけられた。

6. ロッテルダムとアムステルダムで

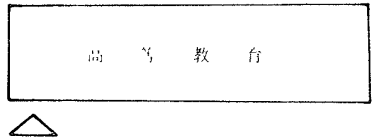
9月27日ジュイスブルグ駅11:27発の急行でユトレヒトへ。汽車の旅、とくに国境をこえて列車で隣の国へ足をのぼすということが何となく面白い。国境の駅エメリッヒで税関の役人にパスポートを一寸見せただけで出国ということになる。何時オランダに入ったのか、国境がどこなのか窓の外に目をこらして話あっているうちに、それでも窓外の風景、樹々の様相や家の屋根が少しずつ変ってオランダ風の景観が窓辺に展開する。

ユトレヒトに入って感じたのは街の汚れ、とくに駅構内やショッピング街が到る所犬の糞で汚れていたこと。第一印象は大事だというが、オランダの第一印象がこれだったというのはどうもいただけない。ユトレヒト以外の町はそれほどでもなかったし、むしろオランダ全体としてはこの国の人々が花好きで、それぞれの家の窓に必ずといってよいほどに色どり彩やかな花の束がみられ、とても素晴らしいと思ったのに。

ノルトライン・ウエストファーレン州の教育組織図

<1980年7月発行 同州文部大臣広報誌「Aller Anfang ist neu」所載>

高等教育：総合大学・工業大学・教育大学・音楽大学・美術大学・体育大学・総合高等専門学校・単科高等専門学校



年齢	職業訓練修了資格	高等専門学校入学資格	大学入学資格（アビトゥーラ）	年齢
13				13
12		中等教育第2段階		12
11	・職業教育諸学校※	・キムナジウム上級学年	・コレクティール	11
10				10

ハウプトシューレ修了資格		中級修了資格I ハウプトシューレ修了資格10年	上級専門学校入学資格 11学年への進級	年齢
9				9
8		中等教育第1段階		8
7	・ハウプトシューレ(基礎学校)		・リアルシューレ(文科学校)	7
6	・キムナジウム下級学年		・クサムトシューレ(総合学校)	6
5				5

初等教育		年齢
4		4
3		3
2	・クルントシューレ(基礎学校)	2
1	・学校幼稚園<付設1年間>	1

※ 職業教育諸学校 職業訓練学校・職業専門学校 職業1級学校・上級専門学校

オランダの郊外の風景も一だんと美しい。デ・ハーレル城、キンデルダイクの風車等々、今思い出してもその風景が目には浮ぶほどである。

ロッテルダムには5日ほど滞在し、その間に学校その他文化施設の参観もする。人口60万オランダ第二の都市は意外に小ぢんまりとしたたたずまいをもっていた。かつて世界最大の貿易港としての繁栄をほこり、今でもオランダの経済の30%をしめているとのことであるが、そうした活気はあまり感ずることができなかった。

ロッテルダムでも、アムステルダムでも感じたことの一つはその歴史の古さ、17世紀にはさぞかし隆盛を極めたであろうと思われる歴史の重さである。ロッテルダムの真中にグロチウスの像がその威容を見せ、美術館にはいたるところ、ルーベンスやレンブラントの絵が大きなスペースを占め、町のどこかに今でもエラスムスやホイヘンスの息づかいが感ぜられそうな、そうしたたたずまいがロッテルダムやアムステルダムにはある。

古めかしきはあるいは家並みや家のつくりによるところも大きい。電柱がないせいかな、と同行の先生が

指摘してくれたが、それだけではなさそうである。家々の壁や屋根などすべての面で17世紀の彩りが感じられ、それがオランダらしさをつくっている。日本の様に次々と新材で新流行の造りの家を建てるなどということはしない。常に他の家々との調和、同一性を意識してつくっている。日本も昔の家並みはそうだったが。

ロッテルダムではテクニコン総合学校を見学する。職業教育といってしまうとそれまでであるが、徒弟制職人教育をつづけてきたヨーロッパの伝統の中で、この市が財政的な負担を覚悟の上で、街の中心に8つの学校を統合して総合技術学校を創ったのが1955年以降という。次々とできたらしいが市の資金で75億が投入されたというから大変なものである。クリスチャン・ホイヘンススクールという名称はこの市の生んだ科学者ホイヘンスにちなんだものだが、われわれの参観した小売商スクールというのも小売商になるために必要な免許を与えるためというだけでなく、商業をするには計算力が必要だし、キーパンチャーの技術もあれば、英語も話せなければならない。…ということでこの学校のカリキュラムは日本の高校の職業科よりは普通科に近くなる。われわれを案内してくれた当校の女生徒の英語はこちらのたどたどしいそれとひきくらべて格段にすばらしいものだった。

教室は各校の専用になっているが、体育館、講堂、図書館等は8校の共用となっており、体育館は7階建てで、温水プールもある。そして講堂は市立劇場をも兼ねた立派なもので舞台装置もすばらしい。

テクニコンのほとんどはMBO(中級職業学校)でこれにはMAVO卒業生とLBO卒業生が少々入学しているが、MBOの少数とHAVO卒業生の大部分を収容するHBO(専門・上級職業学校)がある。又大学WOは、VWOで大学への入学資格を取得した者が進学できるし、ほとんど希望学部に入れるということであったが、医学部のように希望者が多い場合、先ず国家試験成績優秀者が無条件で、残りについては希望者から抽選で入学が許可されるらしい。

日本の様に大学への受験競争が激しくないのは、一つには初等教

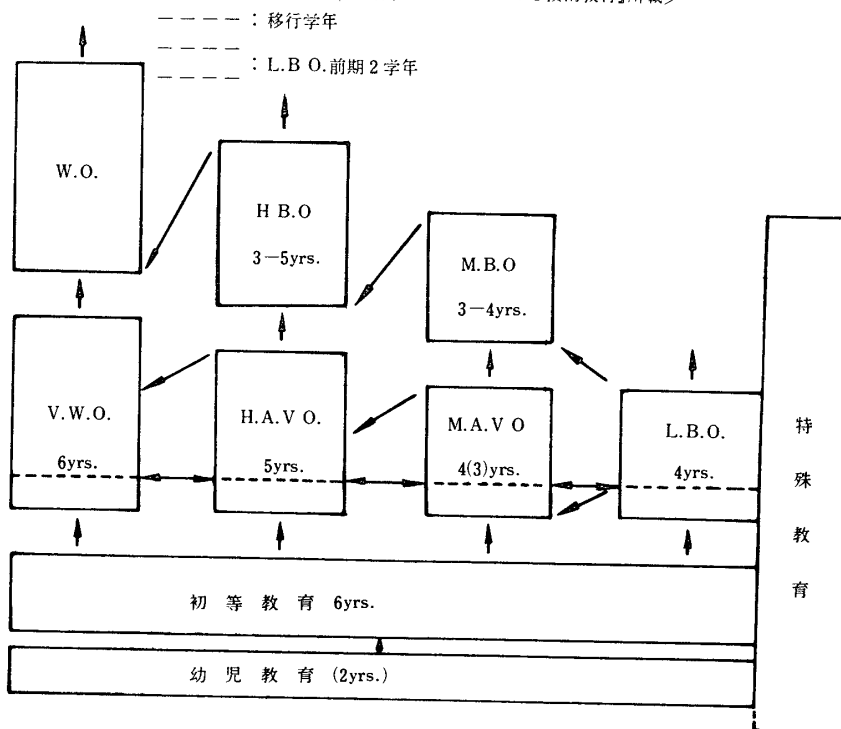
育(小学校)を終えた次の1年間がブリッチ・イヤー(移行学年)で自分の希望と適性によってコースをふり分けられるということもあるが、日本の様に猫も杓子も大学をめざすのではなくHBOもMBOもそれぞれ自分の職業に誇りをもっている人たちが進んでいることによるらしい。むしろ日本では法学部を出てもJuristにはならない人が多いということを知って頭をかき上げていた。

テクニコンのほかにロッテルダムで参観したウォルフフェルト・ヴァン・ボルセレン学校とアムステルダムで訪問する機会があったヨーロッパ・スクールでも、やはり日本とひきくらべてオランダの教育のよさを感じさせられる面があったが、一つは向うの校長先生から「日本とアメリカは同じような人間をつくる教育をしているが、われわれは個性と人格をつくるようにしている」といわれたこと。もう一つはボルセレン学校を見学したついでに市の動物園を訪問し、中学や高校の生物の授業が、動物園を利用して、その園内の教室で授業をうけられるように教育課程がくまれていたこと。

第一の点について付言すれば、日本が特に戦後の教

オランダにおける教育組織簡易一覧表

<オランダ教育科学省1979年2月刊行「オランダにおける技術教育」所載>



W.O. 高等教育(大学教育)
 V.W.O. 大学準備教育
 H.B.O. 上級職業教育
 技術専門学校
 家政専門学校
 農業専門学校
 芸術専門学校
 中等教員養成学校
 商業専門学校
 H.A.V.O. 普通中等教育上級レベル

M.A.V.O 普通中等教育中間レベル
 M.B.O. 中級職業教育
 技術学校
 貿易学校
 家庭科学学校
 社会教育学校
 商業学校
 芸術学校
 幼稚園教員養成学校
 L.B.O. 初級職業教育

育を出発させた際、教育の平等を機会均等という意味においてでなく、能力にかかわらず同じ内容を、というかなり画一的なものとしてうけとってしまったのではないかという反省である。個性をと口には言いながら戦後教育は個性を偏差値の中に埋没させ、画一的なふるいの中から落ちこぼれをつくってしまった。オランダでも、ドイツでも自由で個性豊かな子供たちを教育しているように感じられたのは、日本の現状があまりにも画一的でむりやり進学率だけ上げてきたことからひきくらべてのことかもしれない。

ドイツとオランダに共通していえることがもう一つある。学校の終るのがドイツでは午後1時から1時半、オランダではもう少しおそい様だが、かなりゆとりをもって学校の教育が位置づけられていることである。学校から解放されたあと本当に自由に時間が過せるらしい。塾も予備校も無縁である。日本ではただ形だけまねて「ゆとり」の時間とか、授業時間を2～3時間減らそうと苦心しているが、その教育風土を改めない限り「ゆとり」の時間は決してゆとりにならず、減らされた時間はそのまま塾での勉強時間に換えられるだけであろう。オランダで午後5時になるとすべての商店が(レストランを除いて)閉められ、土曜日はもっ

と早く店じまい、日曜は休み、月曜も午前中は「準備中」という生活のテンポは、到底日本人にはついてゆけないゆったりしすぎるものだが。

先述したもう一つの点、動物園で生物の授業がなされているというのも、今後日本の学校教育を考える上でまねていいものではないだろうか。動物園には専任の中学校の先生がいて、その人が小学生にも高校生にも授業をしてくれるし、スライドや標本も沢山用意されているようだった。日本は動物園や博物館(名古屋市には科学館も)、美術館をかなり持っておりながら、学校教育はそれらを充分利用しきることをしていない。

そしてこのごろは、生物の授業で動物の実物はおろか剥製も皆なくなってしまったという話を聞くと、ロッテルダムの動物園と学校とのつながりはすぐにでも日本の中学校にとり入れたいものの一つである。

アムステルダムでの最後の夜、その最後の夜を楽しもうと街へ出たわれわれをめぐらして、かなり激しい雨が降った。そういえばこの一か月の旅行中、これが最初の雨だった。そしてその雨の過ぎ去ったあと、北欧の樹々は一ぺんに秋の装いをたたえていた。これからオランダは秋に入るらしい。